



令和4年11月（文責：本田）

☆星“すばる”をさがしてみよう

旧暦10月（今の11月）ごろに、北東からふく風のことを『星の入東風（いごち）』といいます。この風がふくと、天気が変わりやすいといわれ、昔の船乗りたちは注意をしていました。

ここでいう星というのは『すばる』という星のことです。すばるは、ひとつの星ではなく、青白い星の集まりで『プレアデス星団』ともよびます。「星」というだけですばるをさすように、すばるは昔から日本人にとっても親しまれてきました。今の時期だと、日が沈んだころ、東の空からのぼってきます。小さな「？」マークのようにならんだ星の集まりを探してみましょう。

『参照：きせつのお話366日（学研）長谷川康男・監修』



☆文化祭の日にMyしおりコンクールをします！

1学期に全校で取り組んだMyしおり作り、今年も大変良い作品ができています。文化祭の日には、全校生徒で審査をしてもらい、個人賞とクラス賞の優秀作品を決めます。



下の2枚の絵の違いを5か所見つけてください

「3、7、1」。伯爵夫人の亡霊は、自分を死に追いやった青年士官のゲルマンの枕元に現れ、必ず勝てるカードの秘伝を伝えました。そして養女のリザヴェータと結婚するなら、自分を殺した罪を消してやると語るのです。



答え

- ① 右上・マークの向き
- ② 左上・窓の柵
- ③ 夫人のリボンの長さ
- ④ 士官の襟章
- ⑤ 右下・マークの種類



よかったら、よんでみてね



『 あの夏の正解 』

早見 和真・著（新潮文庫）

この本は作者の早見さんがコロナ禍で甲子園という夢を奪われた球児たちに密着し、特別な夏の意味を問うたノンフィクションです。

2020年、新型コロナ感染拡大により春のセンバツ、夏の甲子園が中止になりました。元高校球児の作者は、済美高校と星陵高校に密着しました。

甲子園のない夏を選手や指導者は何を思ったのか。今まで当たり前だったことが当たり前じゃないことに気づき、その尊さを知ることができます。



『 いけない 』

道尾 秀介・著(文春文庫)

この本は4章のミステリーから成り立ち、各章の終わりに1枚の写真を見て、その章の謎を解きます。

物語の第1章の舞台は、白沢（はくたく）市と蝦蟇倉（がまくら）市。この2つの市を結ぶ通称・白蝦蟇（しろがま）シーラインの途中に弓投げの崖という場所があります。その断崖は、大小2つの鋭い先端が海に向かってザリガニのはさみのように突き出しています。そして以前からその場所は、死者の霊に引き寄せられてしまうので、決して崖を見てはいけないと言われていました。



『 ヨンケイ 』

天沢 夏月・著（ポプラ社）

敷地ばかり広いだけで、手入れの行き届いてないグラウンド。東京都島嶼（とうしょ）部に属する俺たちの住む島は大島とよばれている。

渚台高校は3学年合わせても100人程度しかいない。慢性的な人数不足に悩む渚台高校陸上部に奇跡的に男子4人のスプリンターが揃った。しかし人間関係は最悪。インターハイ予選を目前に控え、4×100mリレーいわゆる四継（ヨンケイ）に挑むことになる。はじめは上手くいかなかったバトンの繋ぎだったが、4人の本気がぶつかり合ううちに変化が出てくる。